# 令和８年度前期終業式　校長講話

令和８年９月 30 日

ちょうどひと月前（8/31）、夏休みが明けた最初の日の集会で、
私はみなさんに、
「この秋には、ぜひとも読書をしてほしい」
と、お話しました。

なぜ読書をすすめたのか、それは、自分では一生かかっても経験することのできない「他者の経験」に触れる機会となるからです。
そして、
「そんな考え方もあるのか」
「自分だったら、どう考えるだろう」
「この人物は、なぜそのような行動をしたのだろう」
本を読みながら、そうやって考えることで、自分の経験だけでは届かないところまで、自分の視野を広げることができ、みなさんの成長につながる、
そういう効果が読書にはあると思うからです。

そのうえで、今日はさらに、もう一歩踏み込んで、
私たちのとっての「読書」の意味、ということを考えてみたいと思います。

読書とは何か、一言で言えば、それは、「心の食物」と表現できます。
わたしたちは、毎日、食事をとっています。それはもちろん、わたしたちの肉体を養うためにとっているのであって、もしも一日、食事をしなければ、大変ひもじい思いをして、一日どころか、一度の食事さえも、これを欠かしてしまったりすると、我慢するのはなかなか難しいことと思います。




ましてこれからは、「食欲の秋」、「味覚の秋」と言われて、食べる楽しみが大いに増す時期ですので、食事の時間が待ち遠しくて堪らなくて、食べ物のことばかり考えてしまう、ということもあるでしょう。
つまり、日々の食事は、私たちの体を養うためにとっているものです。

これと比べて、私たちの心を養うためにとるもの、「心の養分」となるもの、それが読書だと思います。
そう考えると、読書とは、食事と同様に、一日でも本を読まなければ心がひもじくなる、というくらい大事なことになるでしょう。


生成ＡＩ（Copilot）による作成

ところで、「心の養分」という以上、それは、日々の食事が「私たちの肉体に力を与えてくれるもの」であるのと同じように、「私たちの心に力を与えてくれるもの」でなければならないでしょう。
したがって、読書以外にも、私たちが人生の中で経験する様々な出来事も、それが深刻であれば深刻であるほど、私たちの心に力を与え、心を養い、鍛え上げてくれるものである、と考えられますので、そうした深刻、重大な経験もまた、「心の養分」になるもの、と言えるのかもしれません。

ここで、さらに深堀りして考えてみます。
ある人が、深刻な、重大な経験をしたとします。でも、その経験が、その人の人生の中でどのような意味を持つのか、その意味するところを見出すことができなければ、例えば、ただ「楽しかった」とか、ただ「つらかった」などそうした言葉でしか振り返ることができなかったとしたら…
せっかくの「重大な経験」も、磨き上げればダイヤモンドにもなるような宝物を、川原に転がったただの石ころとしか扱えないのと同じで、それでは「心の養分」として活かすことにはならないと思います。

つまり、日々のさまざまな経験の中に宿る意味に気付くためには、そこに光を照らして、意味を見出す役割を果たしてくれる何かが必要なのであって、その役割を果たしているのが「読書」なのです。

そう考えたとき、私たちが、人生をより豊かに生きるために大切なことは、
まず、読書によって、偉人や先哲が歩まれた足跡を辿ってその苦心の跡を探り、そのうえで、それを参考にしながら、自らの志を立て、その志を実現するための実践を積む、その実現のためにまた本を読む、これを生涯繰り返すことなのだと思います。

実際に、世に名を遺した実践家ほど、寸暇を惜しんで読書をされています。
象徴的な人物のひとりとして、全国の多くの小学校に、銅像が建てられている二宮金次郎、二宮尊徳さんがあげられます。
彼は、10 代で両親を亡くされ、おじさんのもとに身を寄せ、農業を手伝いながら、寸暇を惜しんで読書をされました。そうやって得た知識を実践に活かして、やがてその実力が周囲に認められ、武士に取り立てられ、荒廃した農村を再興させることに成功し、50 代で江戸幕府にも召し抱えられ、全国の農村の再興を請け負う大事業家として、尊敬を集めることとなりました。

「日本資本主義の父」と呼ばれ、生涯で約 500 社の企業を起ち上げた渋沢栄一さん。一万円札の肖像に描かれた人として知っていると思いますが、この渋沢栄一さんが深く尊敬していたのが、二宮金次郎さんでした。その渋沢栄一さん自身も、大変な読書家だったそうです。

私たちもまた、このお二人を見習って、みなさんであれば、学習や部活動など、いろいろ忙しい中にも、その合間を縫って、毎日、少しだけでも時間を割いて、読書を、それも「心の養い」となる良書にふれる時間を、持ってもらいたいと思います。
そして、それを積み重ね続けて、豊かな人生を実現してほしいと思います。

読書の秋です。みなさん、是非とも良書にふれてください。

参考文献：『修身教授録』森信三 著